建築デザイン教育の成果活用の 実験的取組みについての考察

—明治大学建築設計Ⅴおよび大学院設計
スタジオⅠに関する事例—

A STUDY ON THE EXPERIMENTAL UTILIZATION OF OUTCOMES FROM ARCHITECTURAL DESIGN EDUCATION

—A case study on Architectural Design V at Meiji
University and Architectural Design Studio I at
Graduate School, Meiji University—

田中友章——*1

小林正美——*2

キーワード:

建築デザイン, 敷地読解, 教育プログラム, まちづくり

Keywords:

Architectural design, Site reading, Education program, Community development

Tomoaki TANAKA —— *1

Masami KOBAYASHI—— *2

Site reading is a key aspect in the initial studies of architectural design. The case study is conducted on six-year experience of undergraduate and graduate architectural design studios where significant efforts are given to the site reading and contextual analysis. The study is also conducted on experimental utilization of their outcomes in three exhibitions and other related activities. The results are examined in two ways: the educational effects and the merit in regional community development. The possibility of such educational program is discussed in relation to the recent social needs which the new architectural profession is expected to undertake.

1. はじめに

1-1. 研究の背景と目的

今日の社会状況のなかで、建築デザイン、都市デザイン、まちづくりなどの関連分野を内包する建築教育はさまざまなニーズへの対応が求められている。教育の側では、JABEE、UIAユネスコ建築教育憲章^{注1)}など国際化の動向への対応のため設計演習の時間的・内容的充実が求められ、より実践的な教育方法の導入やプログラムへの位置づけが試行されつつある。一方では、地域社会の中での大学の役割の視点から、大学の持つ資源や研究教育成果を地域まちづくりに還元・活用することへの期待も大きい。

上記のような視点から、まちづくり、都市デザインに関する分野で課題演習の充実例や実践的取組み事例^{1) 2)}が既に報告されている。また、その実践的教育の成果と展望については、都市計画部門の研究協議会にも取り上げられ、広範な議論が行なわれた上で連携のプラットフォーム構築への課題や方向性が確認された。³⁾そこでも参照されているが、大貝⁴⁾は、アンケート調査結果から全国都市計画系研究室のまちづくり支援活動を概観して、成果や課題をまとめ、まちづくり実践教育と地域貢献との関係を考察している。

他方で、建築デザイン分野においても同様の状況やニーズは存在するが、建築デザイン教育とまちづくり、大学の地域社会貢献との関係を扱った事例はまだ少ない。筆者の1人の小林⁵⁾は、ハーバード大学大学院と行なった同時並行演習に関する報告で、都市デザイン教育を含む広範な教育プログラムについて考察し、別の報告⁶⁾では将来求められる職能の拡張可能性を展望している。^{注2)}このように今後、大学での建築教育やその実践的取組みでは、新しい専門家

像を目指して関連分野で領域横断的アプローチが求められている。

野澤⁷⁾は、工学院大学のカリキュラムの考察から、「建築デザインと都市デザインのコラボレート」による教育の可能性について言及し、実践教育の全体的な展望を試み、教育重視型、研究重視型、プロジェクト型という3つの型に整理している。前者2つは、既に多くの事例が報告されているが、教育・研究の成果を巧みにスピアウトさせ地域との関係の中で実践的活動や協働活動を展開するプロジェクト型はまだ事例も少なく、そのような実践例を報告し考察することには意義が認められる。

本稿では筆者が合計6年間継続して指導に関わった建築設計演習について課題内容、進行および成果について報告し、さらに、そこから派生し実施された3つの展覧会と関連活動の実験的プロジェクト総体について報告と検証を行なう。その内容とプロセスを整理して、教育的効果および地域まちづくりとの関係の2つの側面について成果を考察し今後の課題を抽出することにより、新たな専門職能へ向けて建築デザイン教育の可能性を展望することを目的とする。

1-2. 研究の対象

研究事例は、明治大学理工学部建築学科の学部4年生対象の建築設計演習科目「建築設計Ⅴ」および明治大学大学院理工学専攻科の修士課程1年生対象の建築設計演習科目「設計スタジオⅠ」である。筆者の田中は、前者について1999年から2002年まで4年間連続して、後者については2003年から2004年まで2年間連続して、合計6年間指導に携わった。また、これらの演習科目の成果物を発展的に活用するかたちで、有志の学生とともに、2001年から2004年に「かわさきの場所と変遷展」「かわさきの場所と変遷展Ⅱ-多摩川フォー

*1 明治大学兼任講師, (株)フォルムス 代表取締役・M. Arch., 工修
(〒214-0014 神奈川県川崎市多摩区登戸2710-6-302)

*2 明治大学理工学部建築学科 教授・工博

*1 Visiting Lecturer, Meiji University, Principal, Forms Co., Ltd., M. Arch., M. Eng.

*2 Prof., Department of Architecture, School of Science and Technology, Meiji University, Dr. Eng.

カス-」「二ヶ領用水と円筒分水 時のランドスケープ展」という3つの展覧会を開催し、関連した活動を展開した。本稿では、カリキュラム内で行なわれた設計演習の内容、それから派生してカリキュラム外で行なわれた一連の実験的取組みの双方を研究の対象とした。

1-3. 研究の方法

本研究は、筆者が1999年～2004年の合計6年間、各春学期に指導に携わった過程で得た知見と、その成果を展覧会等の一連の活動に発展させる過程で経験し観察した知見を基にしている。資料として、各年度に配布した課題書と参考資料、成果物の記録を参照した。また、展覧会等の活動については、準備段階の記録や終了後に作成された報告書を参照した。

本稿では、2章で学部演習科目の内容、3章で大学院の演習科目の内容について紹介する。4章では、学部の演習成果を活用した2つの展覧会、5章では 大学院の演習成果を活用した展覧会について、実現への過程や内容、関連した活動について報告し、成果と課題を考察する。続いて6章で、演習の成果と展覧会等の活動の相関関係を明らかにし、これらの実験的取組みについて、その教育的効果と地域まちづくりにおける大学の役割の双方について考察する。

2. 学部演習科目「建築設計Ⅴ」

2-1. 演習の概要

明治大学理工学部建築学科では、1年後期に設けられている製図法の基礎習得が目的の「建築製図」に引き続き、2年前期「建築設計Ⅰ」から4年前期「建築設計Ⅴ」まで半期ごとに設計演習科目が設けられている。3年前期「建築設計Ⅲ」までは必修科目で、以降は選択科目である。^{注3)} 本研究の対象の一つである「建築設計Ⅴ」は、4年前期の毎週2限連続180分、14週の設計演習科目である。

「建築設計Ⅴ」は専任教員2名に加えて、3～4名の非常勤講師が担当し^{注4)}、初めの4週間で履修生全体共通の小課題を行ない、その後に各々の非常勤講師が担当するスタジオ^{注5)}に分かれて異なる課題を行う形式で進めた。それぞれのスタジオは、中間講評会をはさんで9週間で、最終週に最終講評会を実施した後に、各スタジオから優秀作品を選抜し特別講評会を合同で行なった(図1)。本稿で以下報告するのは、「建築設計Ⅴ」で筆者のうち田中が担当し、1999年～2002年に実施された9週間スタジオ(以下、設計Ⅴスタジオ)である。単位を取得した各年の履修者数は、1999年が11人、2000年が7人、2001年が9人、2002年が8人であった。

2-2. 設計Ⅴスタジオの内容

設計Ⅴスタジオの課題内容としては、与えられた敷地領域について調査・分析等を行なってから各自が敷地を設定し、芸術家が滞在し発信を行なう施設をプログラムも含めて提案し、設計を行なうものとした。これは本演習が、敷地やプログラムを与件として設計課題を行なう「建築設計Ⅰ～Ⅳ」と卒業設計の間に位置することを意識

図1 建築設計Ⅴの進行プロセス

識したもので、①敷地領域から本課題に適した敷地を抽出し、設定する。②課題テーマと設定した敷地を考慮して施設プログラムを設定する。という2つの前段階を経て建築デザインを行なう形式とした。与件を前提に設計を行なうという「建築設計Ⅰ～Ⅳ」の教育目標に加えて、卒業設計の前段階として①と②に対処する能力を高めることを目標とした。進行は、①の全体と②の初期提案を中間講評会までに行ない、残りの作業を最終講評会までに行なうこととした。

設計Ⅴスタジオは、前半に行なわれる敷地領域の文脈の読解や分析に力を入れているのが特徴である。4年間に川崎市内の9つの異なるエリアに敷地領域を設定し、その作業を行った。各年の敷地領域の位置を図2に、その概要を表1に示した。敷地領域は、斜面、河川、港湾、工業地域など場所性の強いエリアに設置し、近代化遺産や土木構造物など手がかりとなる既存施設の含まれる領域とした。また、明治大学建築学科が生田キャンパスに立地することから、地元大学である利点を生かせるよう敷地領域を川崎市内に限定し、行政等からも情報の提供や協力を得ながら進行させた。

その他、設計Ⅴスタジオの特徴としては以下の点が上げられる。

- 1) 特徴のある敷地領域を設定し、フィールドトリップを実施するなどして、敷地との接触の機会を増やすことを促した。
- 2) 前半の共同作業の1つとして対象領域の木製模型を作成した。
- 3) 市からの協力で入手した過去の航空写真や地図などを活用し、時間軸の視点を入れて敷地文脈の読解作業をおこなった。
- 4) 中間講評会を、2000年以降は敷地領域付近の会場で行ない、招聘した講師にもその場所性を意識づけて講評を行なった。

設計Ⅴスタジオの後半では、これら敷地文脈の読解の成果をバネにして、建築デザインを行なうことを主眼の1つとした。形式としては、設定されたそれぞれの敷地と施設プログラムをもとに、学生各自が建築デザインの提案を行なうという一般的な設計演習科目に近い内容および進行であった。

2-3. 設計Ⅴスタジオの成果と課題

4年間の設計Ⅴスタジオの成果としては、まず前半の作業成果の充実があげられる。1年目から敷地読解の作業が後段の建築デザイン

表1 設計Ⅴスタジオで対象とした敷地領域の概要

実施年	敷地番号	敷地領域名称	敷地領域の特徴
1999年	1	稲田登戸	斜路塔など稲田登戸病院関係施設が斜面に点在
2000年	2	宿河原	河川敷に二ヶ領用水宿河原堰、舟島神社が立地
	3	丸子橋	丸子の渡し跡、多摩川対岸に浅間神社が立地
	4	河港水門	登録文化財 河港水門、味の素川崎工場
2001年	5	桜本	桜堤運河脇にポンプ場や密集市街地(旧池上町)
	6	千鳥町	東京電力川崎火力発電所、ちどり公園
	7	東扇島	首都高速湾岸線排気塔、広域防災拠点予定地
2002年	8	殿町	小島新田駅跡線橋、殿町第三公園
	9	南渡田	NKK南渡田事業所、浜川崎駅、昭和電線電線跡地
(2003年)	参考	(設計スタジオⅠ)	登録文化財 円筒分水、久地不動尊が立地

図2 対象とした敷地領域の位置(川崎市市域との位置関係)

へ向けて設計の手がかりを得るための有用な資源であることが認識された。2年目以降は行政等からの協力も得て、提供された情報も充実し、その成果はさらに向上した。しかし、2000年以降は対象とする敷地領域を複数にし、履修生をグループに分けて対応させたことも重なり、一部の学生にとっては作業がやや過大となる現象もみられた。結果として、作業行程に遅れが生じ、後半の建築デザインの作業が時間不足となり、提案内容が建築まで十分に落とし込めない学生もいた。よって、前半の敷地読解の対象範囲と時間配分を適正規模に制御し、集中的に行なうことが重要と考えられる。その点で十分に最終提案の充実につながらなかった部分は反省点である。

図3 敷地読解の成果（7 東扇島）

図4 敷地読解の成果（6 千鳥町）

3. 大学院演習科目「設計スタジオ I」

3-1. 演習の概要

明治大学大学院理工学専攻科建築学専攻では、修士課程1年生を対象に、前期の建築デザイン中心の「設計スタジオ I」後期のアーバンデザイン中心の「設計スタジオ II」という2つの設計演習が選択科目として設けられている。⁷⁶⁾ 本研究のもう一つの対象である「設計スタジオ I」は、前期の毎週2限連続180分、15週の設計演習科目である。「設計スタジオ I」は2名の非常勤講師が担当して実施した。その導入期だったため試行錯誤の部分も多く、2003年は2名の教員が共同で1つのスタジオの指導を担当し、2004年は2つのスタジオに分かれて演習を行なった。本稿で報告するのは、「設計スタジオ I」の中で筆者の田中が担当したスタジオとして2003年に実施されたもの（以下、設計スタジオ I）で、履修者数は17人であった。

3-2. 設計スタジオ I の内容

設計スタジオ I は大学院レベルの建築デザインのスタジオとして設定され、15週スタジオとして期間を3つのフェイズに区切り、段階的なプログラムを設定して設計課題に取り組んだ。（図5）具体的には、川崎市高津区にある登録文化財「二ヶ領用水・円筒分水」周辺を敷地領域に設定し、その場所性や重層する都市文脈の読解をベースに、都市における河川空間活用や社会公益的活動の場も視野に入れた、新しいタイプの博物館の設計に取り組んだ。設計スタジオ I では、2章で報告した設計Vスタジオの4年間の成果と経験を発展的に引き継ぎ、大学院レベルの演習として以下の教育目標を設定した。

1) 敷地周辺の文脈読解を経て、設計提案を行なうのに適切な潜在性の高い敷地を抽出し、設定する。

図5 設計スタジオ I の進行プロセス

2) 過去の類似施設や事例の調査・分析を経て、適切な施設プログラム、展示計画、近代化遺産の活用方策を設定し提案する。

3) 設定された敷地やプログラムを前提に、場所性に応答した建築デザインの提案を行なう。

4) 提案する建築について、NPOや市民など多様な主体の参画も含め、その使われ方や運営についての提案を行なう。

ガイダンスと敷地見学後の第1フェイズ（4週間）では、学生をグループに分けて以下の7つの作業に取り組んだ。学生は複数の作業に関わり、それらの成果物は発表して相互に共有し、各自が以降のフェイズでの作業に活用することとした。

- ① 敷地周辺領域の1/200の模型の作成
- ② 敷地周辺の地域史やより広域の都市形成史の調査
- ③ 航空写真や地図を利用した敷地周辺の時景観分析
- ④ 都市計画情報等を利用した敷地周辺の都市構造の調査・分析
- ⑤ 博物館施設の事例調査と分析
- ⑥ 展示計画事例の調査と分析
- ⑦ 近代化遺産の活用事例の調査と分析

続く第2フェイズ（4週間）では、プログラム設定や初期スタディを行ったが、冒頭2週間で平行して実験的な小課題「CUBE」に取り組んだ。視覚的かつ3次元的なベレルで設計への手がかりを得ることを目的とし、文脈読解の成果を各自の認知に基づいて10インチ角の模型と30インチ四方の手描きドローイングで再表現した。この成果物を含む初期スタディは中間講評会で発表し、講評した。

最終の第3フェイズ（5週間）では、主に1/200スケールでの建築デザインの検討を行なった。加えて各々の提案内容によって、展示計画や活動プログラムなどの検討を行った。進行は一般的な設計演習科目に近いものだった。最終講評会で全員講評を行った後に、優秀作品4点を選抜し、それらを講評する特別講評会を課題敷地付近の会場で実施した。この機会には建築デザインの周辺関連分野からも講評者を招いて講評会を実施し、より広範なデザイン教育の枠組みの中で成果物を位置づける試みとした。あわせて、第1フェイズの成果物や小課題「CUBE」の一部を会場に展示し、地域の市民にもプレゼンテーションを公開して、成果を発表する機会とした。

図6 特別講評会の様子

図7 最終提案作品（右）

3-3. 設計スタジオ I の成果と課題

成果として、上位の作品群を中心に3つのフェイズの獲得目標が一定程度達成されたことが認識された。その要点を以下にまとめる。

1) フェイズ1の文脈読解は、多面的に場所の特性を把握する成果物を生み出し、建築デザインへのプロセスで有効な手段であった。

2) フェイズ1の類似施設や参考事例の調査・分析は、プログラム設定を行なう際の資料として有用で、教育的効果があった。

3) フェイズ2の小課題は、スタディを行なう初期の段階で視覚的・3次元的な作業を促進したという点で効果的だった。

4) 15週間スタジオだったため、フェイス3の作業に十分時間を配分可能で、プロセスを建築デザインへつなげられる成果があった。

5) 学内の最終講評会と学外の特別講評会を行ない、全員講評の機会を確保しつつ、広がりのある成果発表の場を設けた。特別講評会では景観デザイン、環境デザイン、都市デザインなど関連領域から講評者を招き、分野横断的な視点から共通のプラットフォームを設けて講評を行うことができた。

現時点では、まだ大学院レベルで演習科目を設定している大学は限られており、教育方法の蓄積も少ない。その設置自体は意義のあることだが、設計スタジオIは導入期だったため、課題も多くあった。以下に、解決策の考察も含めて列記する。

1) 大学院レベルでの15週間スタジオ演習を設定すると、週2限の選択科目としては、内容がやや過大となってしまった。

2) 履修学生の属性や習熟度にバラツキが大きく、各段階の課題設定や進行との整合が難しい場面もあった。

3) 選択科目で履修者数が事前に把握できないため、教育方法の最適化が困難であり、前半の進行は再調整せざるをえなかった。

4) 結果、当初履修を希望して、途中で断念する学生も複数いた。

上記の課題に対応するためには、大学院の教育プログラムにおける位置づけを整理し、より明確にすることが重要である。例えば専門職育成のコースを設けて、その主要科目の一つとして設定する、前後に履修する演習科目との条件付けを明確化するなど、大学院レベルの演習科目の教育成果を確実にするための方策が求められる。

4. かわさきの場所と変遷展

4-1. 展覧会の概要

2章で報告した設計Vスタジオの成果を活用する実験的取り組みとして、2つの展覧会を実施した。以下にその内容を報告する。

設計Vスタジオでは、そのプロセスにおいて敷地文脈の読解に特に力を入れてきたが、川崎市内に点在する敷地領域での課題を続ける過程で、各領域の木製模型、敷地読解の成果としてのドローイングや分析図等が集積してきた。3年間経過した時点で、これらの中間成果物に活用があることに着眼し、それらを発展的に再構成して展覧会を開催することを構想した。

設計Vスタジオは、カリキュラム内の位置づけであったが、今回の構想はカリキュラム外の取り組みとならざるを得ないので、建築学科教室に相談した上で理解と後援を得て、筆者が3年間の履修生有志とともにプロジェクト型の実験的取り組みとして実施することとした。その実施にあたっては、以下の3つを目標とした。

①演習の成果を地域まちづくりに寄与できるよう市民に還元する。

②社会と接点を持つ過程で学生に専門職能の可能性を認識させる。

③プロジェクト遂行・運営の経験で学生の実践的能力を高める。

実現に向けては、上記の事情から予算も自主的に確保することが求められた。活動展開を目的の一つとして任意団体「川崎のまち資源を考える会」を設立し、市民等の理解や協力、企業等の協賛や協力を得て、場や資金など必要な資源を調達した。そして、約5ヶ月の準備期間を経て、アートガーデンかわさきにて2001年12月4日～9日の6日間「かわさきの場所の変遷展」(以下、場所と変遷展)を開催した。(図8)展覧会は、1999年から2001年に設計Vスタジオの対象となった敷地領域1～7について以下の展示物により構成した。

①敷地領域の木製模型(1/200あるいは1/500)

②敷地領域の文脈読解や分析をまとめたパネル(600ミリ角)

③敷地領域の航空写真(1961年、1981年、2001年、各600ミリ角)

④敷地領域に関する図版、写真等により構成された映像

⑤学生有志各人の設計Vスタジオ成果をまとめたポートフォリオ

この展覧会には会期中401人の来場者があり、新聞雑誌等にも取り上げられるなど一定の成果を上げることができた。

また、翌年には上記の展示物を再活用し、再構成するかたちで、「かわさきの場所の変遷展Ⅱ—多摩川フォーカス—」(以下多摩川フォーカス展)を開催した。2000年の設計Vスタジオで中間講評会会場を提供してくれたNPO法人多摩川エコミュージアムと川崎のまち資源を考える会の共催事業として、二ヶ領せせらぎ館にて2002年11月3日～12月21日(41日間)開催した。会期中の総来館者数は2172人であった。会場規模にあわせて、多摩川沿川の敷地領域1～4を中心に場所と変遷展の展示物を再構成し、展示をおこなった。

4-2. 展覧会に関連して行なわれた活動

設計Vスタジオの成果を地域に還元するという目的のため、より効果的に成果を伝達するための試みとして、場所の変遷展の関連活動として、初日のレクチャーと最終日のギャラリートークを開催した。後者については、展示会場に近い敷地領域4～7に関連した場所にゆかりのある方々3名をゲストとして招き、展示物を題材に、まちの歴史や人々の営みについてオーラルヒストリーとして語ってもらうトークイベントとして開催した。(図9)多摩川フォーカス展の関連行事としては、上記と同様の形式のギャラリートークを会期中に開催した。展示会場に比較的近い敷地領域1と2に関連したゲスト4名を招いて開催した。また、終了後に展覧会を含む一連の活動の成果は、それぞれ報告書にまとめて発行した。

図8 かわさきの場所と変遷展

図9 ギャラリートーク

4-3. 成果と課題

展覧会等の活動の成果は、学生にとっては、設計Vスタジオのプロセスから得られた成果物を活用して展示することにより、一定の社会的価値が生まれることが実感できた点である。経験により職能の可能性を認識した点、準備・運営において実践的体験を得た点において、一定の教育的効果が認められた。ギャラリートークは、展示物にゲストによるオーラルヒストリーの側面を追加することで、学生の側には成果物の潜在的価値を認識させる効果があった。市民の側には、展示への興味と理解を充実させる効果があり、アンケート調査の結果からも、展覧会を含む取り組みが市民の地域まちづくりへの意識の高揚にも良い影響を与えることが確認された。^{注7)}

設計Vスタジオは4年間継続したので、2002年の敷地領域8と9についても成果物が蓄積されたが、場所の変遷展の実施時期や多摩川フォーカス展の開催場所との関係でうまく活用ができなかった。実験的取り組みであるためやむを得ない面もあるが、この点で十分な計画性を持ち得なかったのは反省点だった。

5. ニヶ領用水と円筒分水 時のランドスケープ展

5-1. 展示会の概要

3章で報告した設計スタジオⅠは大学院レベルの演習で、設計Vスタジオの経験をふまえて実施されたため、フェイズ1を中心に充実した成果物が得られた。また、4章で報告した展示会の経験から、成果物の活用の可能性も認識され、場所の変遷展と同じ3つの目標をもって発展的に活用する方法が構想された。幸い民間の基金から助成を得て調査研究をさらに進めて成果を発表することが可能となり、これを契機に学生有志によるプロジェクト型の実験的取組みが再び始まった。前回同様、建築学科教室の理解と後援を受けた上で、場や資金など必要な資源は自主的に確保して実施した。調査で従前から協力を得ていた川崎市教育委員会との共催で、対象敷地にも近い大山街道ふるさと館で開催することとなり、約9ヶ月の準備期間を経て「ニヶ領用水と円筒分水 時のランドスケープ展」(以下、時のランドスケープ展)を2004年9月4日～20日に開催した。(図10)

場所の変遷展と同様の形式で成果物を再構成し展示を行うことは容易に想定できたが、展示方法の研究成果も活かして、文脈読解の成果をより3次元的な方法で表現する案が構想された。最終的には、図像情報を中心にした成果物を展示スペースに構成し、その重層的な文脈を3次元的に表現し展示することとなった。文字情報を伴う成果物はパネル展示や印刷物で補完した。展示は以下の物品により構成し、①～③によりインスタレーション展示を構成した。

①敷地領域の航空写真あるいは図像を設置したスチール台(320ミリ角、高さ320ミリ、640ミリの2種)46器

②川崎市の都市形成史に関連した工業製品を設置したスチール台(320ミリ角、高さ960ミリ)5器

③川崎市臨海部と北部の広域の航空写真(320ミリX900ミリ)11枚

④展示のテーマや内容を解説したパネル8枚(円筒分水の設計図やニヶ領用水に関する歴史年表を含む)

⑤展示を鑑賞するためのガイドブック(会場で配布)

5-2. 関連して行なわれた活動

時のランドスケープ展の開催に際しては、社会との接点の持ち方や地域まちづくりへの還元がより強く意識された。設計Vスタジオからの経験やその過程で得られた関係性を活用し、多様なセクターと積極的に連携して目的達成を模索し、以下の活動を展開した。

1) 高津区民祭に参加して、前年に特別講評会を開催した会場で、展示会を広報するプレ・イベントを7月25日に開催した。

2) 多摩川フォーカス展を開催した会場で、広報も兼ねて展示の一

部を先行公開するプレ展示を8月10日～31日に開催した。(22日間)

3) 時のランドスケープ展期間中、展示を解説するギャラリートークを計4回開催し、学生有志も随時会場で解説をおこなった。

4) 高津区まちづくり協議会など市民グループ4団体と共同で、活動紹介と交流のフォーラム：交会「ニヶ領用水をめぐる」を9月19日に高津区役所市民ホールで開催した。(図11)

これらの活動は各々連携した団体と共催などして、場の提供を受けたり、資源を共同活用するなどした。また、財団からの助成や企業からの支援を得て必要な活動資源を確保し、一連の活動を実施した。展示会を含む一連の活動に関連した主体の相関関係は図12にまとめた。終了後に、これらの成果は報告書にまとめて発行した。

図10 時のランドスケープ展

図11 交会「ニヶ領用水をめぐる」

5-3. 成果と課題

時のランドスケープ展と上記の4つの活動は、4章で報告した経験を基に計画されたので、規模や期間も拡大し、さらに充実した成果を得ることができた。合計で約2000人の来場者があり^{注8)}、新聞等にも幅広く取り上げられるなど成果をあげることができた。^{注9)}参加した学生にとっては、建築デザインの職能的技術や成果物が、地域まちづくりとの関係の中で社会的価値を持つことを、実体験として認識できた点で意義があった。加えて一定規模のプロジェクトの遂行・運営に関わることによる実践的教育の効果も認められた。

^{注10)} また、地域市民にとっては、新たな地域まちづくりの創発や団体間のネットワークの広がりなど、時のランドスケープ展の関連活動によるコラボレーション効果を評価する声もあり、設定された目的がかなり達成されたことが認識された。^{注11)}

本章で報告した活動は、期間が長く規模も大きいため、関わった学生や教員にはかなりの負担をもたらすこととなった。結果として授業や研究室の活動とのバランスをとるのが難しいという課題があった。また、カリキュラム外の活動で、資源調達に制約から計画的な展開が難しく、定期的には実施するのは困難との認識を持った。これらはプロジェクト型の取組みの特性と限界を示すものだが、今後有意義な実験を積み重ね、効果的な実践方法を模索していく必要があるだろう。

図12 関与した主体の相関関係

図13 取組みの展開推移と相関関係の変遷の概要(右)

6. まとめ

本稿の総括として、演習およびその成果を活用した展覧会等の展開推移をまとめ、その成果や相関関係を考察する。(図13)全体の展開推移の中で認められた要点を、以下にまとめる。

1) 建築デザイン演習の教育方法については、敷地領域についての文脈読解の作業を前段で充実させることが、その後の設計作業を進める上で有用な手がかりを得る効果があることが認識された。

2) 文脈読解の作業や成果は、建築デザインの分野に留まらず、都市デザイン、景観デザイン、環境デザインなど関連分野における共通項で、横断的な連携への基礎的な技術として重要性が認められる。

3) 文脈読解の成果は展覧会等の方法で転用することにより、地域に成果を還元することが可能であり、地域まちづくりへ市民の意識高揚やその活動の発展への触媒的作用として効用が認められる。

4) 展覧会等をプロジェクト型の取組みとして実施することは、学生が準備・運営に関わる過程で実践的な教育効果が認められ、加えて、実体験として職能の可能性を認識できるという効用もある。

5) 演習における文脈読解の作業や成果の地域への展開の過程では、市民、行政、企業等の協力が重要で、そのような多様なセクターが連携し、有効に役割を果たせる陣容を作ることが重要である。

6) 発展的な陣容形成の観点からは、時間をかけた関係性の醸成が重要で、地域を限定し戦略的・継続的に取り組むのも有効である。

7) 大学の地域貢献の視点からは、建築系学科が地域ニーズに対応する方法として、本稿のような実験的取組みにも一定の意義が認められる。地域や大学の特性を活かした方法や展開が求められる。

今後、建築デザイン教育が見直される場面も想定されるが、ここでは、単体としての建築デザインやそれを支える建築技術の習得だけではなく、都市、環境、社会などの視点も含めてそれを取り巻く広範なコンテクストのなかに建築を位置づけ、相互の関係性を構築できるような職能の修練が重要となろう。そのような新しい専門職能を視野に入れて、教育方法を構築し人材育成を進めていく上では、社会との接点を持ちながら、分野横断的な連携を展開していく必要がある。本稿で報告した実験的取組みに見られる発展性から、図14のような展望を描くことができる。このように、複数分野のデザイン教育を教育プログラムの中に戦略的に位置づけて、地域へと展開されるプロジェクトと連動させることにより、実践的教育方法の拡充と定着を行っていくことが重要となるだろう。

謝辞

演習および展覧会等に関わった市民、川崎市、企業等の方々には協力・支援等をいただき有り難うございました。また、建築学科教室の専任教員と当演習担当の兼任講師の方々には報告した取組みの

図14 デザイン教育の発展性の展望

主旨を理解いただき協力いただきました。以下に名前を列記し、ここに謝意を表します。(肩書きは当時のものを含む、敬称略)

専任教員：香山壽夫教授、加藤隆教授、木村儀一教授、大河内学助教授
兼任講師：榊法明、関谷浩史、寺田尚樹、高橋潤、小池博

図版クレジット

図3) 長友 亮、図4) 松本祥昌、図7) 澤頭 繁

注

- 注1) JABEE(日本技術者教育認定機構)とUIA(国際建築家連合)は共通認証しうるプロフェッショナル養成教育プログラムを規定し、UIAユネスコ建築教育憲章では最低5年間の建築専門教育を義務付けている。
- 注2) 「抽象的な論理を具体的な空間に翻訳する技術をもった専門家」の必要性を「コミュニティ・デザイナー」と呼び提唱している。従来の専門領域を拡張し、都市デザインと建築デザインなどがオーバーラップする領域へ、職能範囲を相互に拡張していくことは重要な課題である。
- 注3) 2005年度入学生から新カリキュラムが適用されており、現行のカリキュラムはこれとは異なる。
- 注4) 1999年は3名、2000年～2002年の3年間は4名の非常勤講師が担当した。なお、明治大学では呼称として兼任講師を用いているが、ここではより一般的な名称として非常勤講師と記述した。
- 注5) スタジオという用語は演習を行なうスペース(製図室等)という意味でも使われるが、ここでは指導する教員と履修生による演習のグループの単位の意味として用いている。
- 注6) 設計スタジオⅡは4年間の試行期間を経て2002年度よりカリキュラム内で開設された。設計スタジオⅠは、2003年度より開設された。
- 注7) 多摩川フォーカス展のギャラリートーク時に行なったアンケート調査(有効回答数15票)で、展覧会等の市民のまちへの意識への影響を尋ねた設問(複数回答可)に対して、①地域を良く知ることにより、まちづくりへの興味や意欲が増した(9票)②時間の中でのまちの変化を知り、将来を考える参考になった(7票)が上位の回答として挙げられた。
- 注8) 各々の来場者数は以下の通り。プレイベント72人、プレ展示1295人、時のランドスケープ展602人、ギャラリートーク47人、交会51人。
- 注9) 主な掲載紙は、読売新聞、朝日新聞、東京新聞、神奈川新聞など。
- 注10) 展覧会等の活動をまとめた報告書に寄せられた参加学生の感想として「体験したさまざまなことは勉強になった」「プロフェッショナルな仕事とは何かを知るキッカケとなった」など、プロジェクトに関わったことによる教育的効果を認識できる記述が複数認められた。
- 注11) 同報告書に寄せられた市民団体の関係者の感想の中に、「地域のまちづくり組織連携は、…交会のコラボレーション効果であり」「今後の活動への刺激ときっかけとなった」など、これらの取組みによるネットワーク形成効果などを評価する記述が複数認められた。

参考文献

- 1) 前田秀寿、宇野求、小林秀樹：大学学部建築都市計画演習における都市デザイン教育の実践―千葉大学都市環境システム演習3の事例―、日本建築学会技術報告集 第24号 pp.439-444, 2006.12
- 2) 小杉学、延藤安弘：「フィールドセミナー」によるまちづくり教育のプロセス評価―大学によるまちづくり演習を事例として―、日本建築学会技術報告集 第17号 pp.459-464, 2003.6
- 3) 日本建築学会、期待されるまちづくり連携のプラットフォーム―まちづくり連携教育の成果と展望―、2006年度日本建築学会大会(関東)都市計画部門研究協議会資料 2006.9
- 4) 大貝彰：大学都市計画系研究室のまちづくり支援の実態と課題、日本建築学会学術講演梗概集 F, pp.25-28 (OS選抜論文), 2005.9
- 5) 小林正美：環境デザインにおけるアーバンデザイン教育の再評価に関する研究―ハーバード大学大学院との同時並行演習(スタジオ)の事例比較を通して―、日本建築学会技術報告集 第16号 pp.343-348, 2002.12
- 6) 小林正美、古市修：「まちづくり」における「シャレットワークショップ」の実験と評価に関する研究―岡山県高梁市における継続的ケーススタディー―、日本建築学会技術報告集 第15号 pp.283-288, 2002.6
- 7) 野澤康：大学設計教育とまちづくりの現場の連携可能性に関する考察、日本建築学会学術講演梗概集 F, pp.29-32 (OS選抜論文), 2005.9

[2007年4月19日原稿受理 2007年7月26日採用決定]